

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成22年5月25日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2006～2009
課題番号：18520251
研究課題名(和文) 写本に見る中世イギリスの言語事情
研究課題名(英文) Medieval manuscripts as source evidence for the language situation in England
研究代表者
和田 葉子 (WADA YOKO)
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号：00123547

研究成果の概要(和文)：

1066年のノルマン人によるイギリス征服の後、フランス語(アングロ・ノルマン語)が支配者の言葉となったが、やがて英語は徐々に力を取り戻し、13世紀中頃には、英語、フランス語、ラテン語の3ヶ国語で書かれた様々な作品が収録されている写本が多く現れるようになる。13世紀中頃、後半、14世紀前半の3つの時期に書かれたそれらの写本を比べると、当時の社会背景を反映して、まず、フランス語がラテン語に勝り、そして英語がフランス語に取って代わってゆく過程がよくわかる。

研究成果の概要(英文)：

In English French (Anglo-Norman) became a language of the upper class after the Norman Conquest in 1066. English, however, gradually began to gain power and the middle of the thirteenth century saw many trilingual miscellanies in English, French and Latin. Studies on these manuscripts, written from the middle of the thirteenth century to the first half of the fourteenth century, have clearly shown how French came to surpass Latin and then in turn began to be superseded by English.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,500,000	720,000	4,220,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学

1. 研究開始当初の背景

中世のイギリスではラテン語、フランス語、英語の3ヶ国語が使用されていたが、やがて

英語が上流階級の言葉になるまでには様々な社会背景があった。従来、中世英文学の研究においては、英語のテキストのみが研究対

象となり、例えば、当時、イギリスにおいてフランス語による文学が著されていたというような事実はまるで忘れ去られたかのような扱い方であった。写本に目を向けると、同じ時期に筆写された作品は英語だけではなく、ラテン語やフランス語でも書かれており、それらが、英語の作品と同時に収録されていることがよくある。複数の言語で書かれた作品を収録する写本を調査することによって、中世における言語事情の実態が明らかになるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

13～15世紀に書かれた中英語による作品に加えて中世フランス語あるいはラテン語の作品がともに収録されている写本の読者と使用者を調査することにより、中世後期における言語事情を明らかにする。

3. 研究の方法

イギリスのケンブリッジ大学図書館、大英図書館、アイルランドの国立図書館、ウォータフォード市立図書館において、13～15世紀に書かれた中英語による作品に加えて中世フランス語あるいはラテン語の作品が共に収録されている写本を調査しながら、日本では入手し難い、中世ヨーロッパにおける教育、宗教、政治、文化の状況に関する資料を収集した。資料は著作権の許す限りコピーして持ち帰り日本でも研究がスムーズに行えるようにした。

4. 研究成果

まず、中世後期のイギリスにおける言語と社会背景の関係を概観すると次のようになる。

1066年におけるノルマン人のイギリス征服の前から、宮廷ではフランス語が頻繁に話され、そこでは人々がフランス文化を謳歌していたと考えられる。というのは、フランス語を母語とする多くのノルマン人がエドワード懺悔王（在位1042～66）に仕えていたからである。エドワードは幼いころから母親の実家のあるノルマンディーで生活していたため、イギリス王になってからは、ノルマン人を教会や国の重要な地位につけた。1066年、エドワードが亡くなると後継者争いの結果、彼の又いここにあたるノルマンディー公ウィリアムが、ローマ教皇のサポートも得て、イギリスに上陸、征服を成し遂げ、イギリス王となった。

ノルマン人が支配するようになってから、かつていたイギリス人の血をひく貴族はほぼすべて姿を消すことになってしまった。イギリスの上流階級の間では、征服から200年の間、フランス語が通常使用される言語であったと考えられる。しかし、やがて、イギリ

ス人との結婚や被支配者階級の人々との接触によって、ノルマン人たちも英語を徐々に理解するようになる。英語とフランス語の二ヶ国語が階級の違いによって使い分けられていた。

13世紀の初めまで、イギリスの王はノルマン王も兼ねていたため、イギリスとノルマンディーは海を隔てていたものの、ヨーロッパ大陸との関係は非常に強かった。やがて、イギリスの領土は拡大し、ヘンリー2世（在位1154～89）の時代には、フランスの約3分の2を手にしていった。ヘンリー1世以外の国王はエドワード4世が1461年に王位を継承するまで、誰もイギリス人の妃を持たなかった。王をはじめとして上流階級の人々にとっては、英語を積極的に排除する必要もなければ、学習する必要もなかったと考えられる。大陸との関係も深かったために、フランス語の使用は当然のように続けられていた。

ウィリアム征服王の娘アデラや息子のヘンリー1世、そしてその妃たちも宮廷でフランス語による文学を書く詩人たちの後援者となり、多くのフランス語文学の作品が生み出された。ジャンルは、宗教書や年代記、寓話物語、英雄物語であった。特に、ワースの著した*Roman de Brut*など、アーサー王の伝説をもとにしたイギリスの歴史がフランス語で書かれていたことはたいへん興味深い。

ヘンリー2世は自分で英語を話すことはできなかったが、聞いて理解できた、ということが知られている。しかし、妃のエレナ・オヴ・アキテーヌ（1122頃～1204）はいつも通訳が必要であったという。

『アングロサクソン年代記』はピーターバラの修道院において、1154年まで英語で記されていた。聖職者の中には、ラテン語とフランス語に加えて英語も読め、話せ、書けた者がいたことが知られている。庶民が理解できるよう説教するには英語が必要だったと考えられる。また、上流階級の人々と大衆の両方と接触するような立場にある者たちにとっては、英語とフランス語の両方を話せることは日常的であったことであろう。また、イギリス人とノルマン人の間に生まれた子供は、両言語を話すことができたであろう。地主や騎士階級、そして都市の富裕な商人たちは、フランス語を知っていたと思われる。

1204年、ジョン王の失政により、イギリスがノルマンディーを失うと、南フランスにはまだ領土をもっていたものの、ノルマンディーのような密接な繋がりがなかったので、ヨーロッパ大陸との関係は疎遠となった。ところが、ジョン王の妃イザベルがフランス人であったので、多くのフランス人が高位聖職者や国家の重要な地位につく機会を得た。さらに、彼の息子のヘンリー3世（在位1216～72）はプロヴァンス拍の娘エレナと結婚した。

しかも、その妃の3人の姉妹がヘンリー3世の弟とフランス王ルイ9世とその弟とそれぞれ結婚したのである。ヘンリー3世はフランス文化を大いに愛し、多くのイギリス人の司教、宮廷の役人たちや貴族を解任して、フランス人を代わりに置いた。そして、王家の財産が王妃の親戚たちに流れることになった。これは、当然、国民からの大きな反発を招き、皮肉なことに、イギリス人の愛国心を煽ることとなり、英語の地位の向上につながった。第6代レスター伯、シモン・ド・モンフォール(1208~1265)はノルマンディー出身であるにもかかわらず、ヘンリー3世に反抗する貴族を糾合して兵を挙げ、最後には勝利し、イギリス議会の基礎を築いた。彼らはイギリス人であるという強いアイデンティティが確立されたのである。そして、最近、イギリスにやってきたフランス語を母語とし、英語を解さないフランス人たちを外国人とみなしたのである。彼は、1258年、王権の制限と貴族による国政監督組織を作ることを選んだオックスフォード条項を認めさせた。この条項はラテン語、フランス語、英語の3ヶ国語で書かれていた。その他、13世紀には重要な布告は英語とフランス語の両方で行われるようになっていた。

このように、13世紀半ばには上流階級でも英語が使われていたと推測できる。フランス語の借入語が増え、フランス語による文学が英語に翻訳され始める。しかし、まだ、法廷や議会ではフランス語が公的な言語として使用され続けていた。しかし、13世紀末にはフランス語を理解する人々が少なくなり、議会宛ての請願書を、ラテン語に訳して後世の人々が容易に理解できるようにした、こともあった。フランス語による請願書には多くの誤りがあり、当時の教養ある人々でさえ、形式ばったフランス語の正しい書き方が分からなくなっていたということを示している。ヘンリー3世は布告を英語で出しており、彼の息子であるエドワード1世は流ちょうな英語を話したといわれている。

やがて、13世紀中頃になるとフランス語の語学の教科書が書かれ始める。ある教科書は上流階級の娘のために書かれ、実生活におけるフランス語を扱っている。また同時期に、フランス語の動詞をラテン語で解説した教本も書かれている。13世紀後期から14世紀には修道院や大学の中ではラテン語かフランス語しか話してはならないという規則が設けられた。

1337年から1453年まで続いたフランスとの100年戦争の結果、イギリス人の愛国心は強まり、フランス語が益々使われなくなった大きな要因の一つとなったと考えられる。その間、黒死病の蔓延、1381年の農民一揆があり、労働力の価値が高まるとともに、労働者

階級の経済力が強まり、それに加えて、富裕な商人たちが社会で大きな力を持つようになった。これらが、14世紀に英語の地位を高めたのである。

14世紀に、英語で書かれた文学作品の最初には、なぜ英語で書かれたのかについて、しばしば断り書きのように、説明がされている。それは、以前には、文学とは宮廷において、フランス語で書かれるものであったからである。1362年には、すべての人々に理解されるべく、法廷において訴訟はすべて英語で行わなければならないという法令が制定された。

ノルマン征服後、学校では、フランス語が使われていた。1327年頃、ヒグデンが書いた*Polychronicon*には、生徒が強制的に全て英語による授業を受けさせられていると書いている。このラテン語の作品を英語に訳したトレヴィサは、それに個人の観察を付け加えて、1349年の疫病の後、教育改革が行われてこの英訳が行われた。1385年にはイギリスのすべての学校でフランス語による教育が廃止され、英語に切り替わっている、と述べている。15世紀には成人のためのフランス語初級教科書が著された。もはや、イギリスではフランス語が伝達手段としては使用されていなかったことがわかる。印刷術をイギリスに導入したことで知られるウィリアム・キャクストン(1422頃~91)は、フランス語と英語の対話集を出版したときに、印刷業だけでなく貿易を生業にしていた彼は、その本によって諸国で商売をすることができるだろうと述べている。

公文書は国際語であったラテン語で書かれていたが、フランス語が支配者であり、教養ある人々の言語という意識が高くなってからは、次第にラテン語に代わってフランス語が書き言葉として用いられるようになった。15世紀になって、ようやく英語が公文書に使用されるようになったと考えられる。1350年頃には手紙などの通信はフランス語で行うのがふつうであり、英語によるもっとも古い手紙は14世紀後半に書かれたものである。1450年以後は手紙や遺言は英語で書かれるようになる。1430年頃には条例の多くが英語に訳されていて、1450年以後、議事録は英語で記録されている。ロンドンの香辛料業者の条例は1345年にフランス語と英語の両方で書かれ、1422年頃のロンドンの醸造業者は英語を議事録の公式言語として採用することを決めている。議会の下院の請願書は1423年からフランス語に代わって英語の使用が頻繁になっている。法令は1300年頃まではラテン語で、1485年まではフランス語で、それ以降はフランス語と英語の2言語で、1489年にはすべて英語になる。ヘンリー5世(在位1413-1422)は英語で手紙を書き、公

文書にも英語を用いようとした。フランスに対する戦いの勝利が国家意識を高めたと考えられる。ヘンリー5世の治世に英語が公用語になる転換期を迎えたといえる。

文学の言語はどうかというと、1150-1250年に英語で書かれたものは、ほとんど宗教文学であった。*Ancrene Wisse* (隠遁修道女の手引き)、福音書の解釈を説明した *Ormulum* や聖者伝などである。他には、ワースを翻訳した *Brut* や *The Owl and the Nightingale* という論争詩や庶民の間で歌われていたバラードなども残っている。上流階級の人々のために書かれた英語の作品がないのは、英語の地位がまだ低かったことを意味している。1250年以後になると、フランス語で書かれていたロマンスが英語に翻訳され、宗教文学以外の作品も出現するようになる。

14世紀後半には英語があらゆる階級の人々によって使用されるようになり、1350-1400年にはジェフリー・チョーサー(1340頃-1400)、ウィリアム・ラングランド(1332頃~1400頃)をはじめ多くの作家によって、優れた作品が生み出された。また聖書の翻訳をしたジョン・ウィクリフ(1384没)も社会に大きな影響を及ぼした。

現存するいわゆる miscellany と呼ばれている、様々な種類の作品を集めた写本のうち、中英語・フランス語(アングロ・ノルマン語)・ラテン語の3ヶ国語による作品が混じり合っているものを調べてみると、筆写された時期が13世紀中ごろから14世紀中ごろまでの写本が非常に多い。13世紀中頃には、上流階級の言葉であるフランス語、そして権威のある書き言葉として確立していたラテン語と同様に、英語が記録するに値する言葉として認められ始めたことがわかる。そして、3ヶ国語による写本の出現は、1258年のオックスフォード条項という公の文書がラテン語、フランス語、英語で書かれた時期と重なる。上述の通り、子供たちのためのフランス語の教科書が現れ始めた1250年頃、ウスターシャーでは、3ヶ国語の作品を含む Cambridge, Trinity College MS B.14.39 が書かれた。これには、聖職者自身が読む作品と、聖職者が大衆に説教するときに使用された作品が収められているのではないかと考えられている。ラテン語の作品の数の割合が一番多く、その次に多いのが英語、フランス語と続く。ラテン語の作品とその英訳があるもの、フランス語の作品の後に英語の訳がついているもの、またラテン語の作品の次にフランス語の訳のあるものが収録されているのは興味深い。英語で庶民を教化するために使われたと思われる。聖職者の中には、こういったマニュアルなしには、特に、ラテン語をすぐに英語に、その場で訳すのを難しいと感じるようになった者がいた時代になって

いた可能性もあったのではないかと。

同じく、13世紀中頃書かれたとされる British Library, MS Harley 978には、よく知られている英語の詩、*Sumer is icumen in* が収録されている。3ヶ国語からなるが、主な使用言語は圧倒的にラテン語とフランス語で、内容としては、宗教作品よりも実用的あるいは娯楽性の高いものが多い。

13世紀後半に書かれた British Library, MS Cotton Caligula A.ix と Oxford, Jesus College MS 29には *The Owl and the Nightingale*、フランス語の3つの詩、英語による短い宗教詩が収録されている。Caligula 写本には、さらに、*La3mon's Brut* と短いフランス語の散文による歴史が収められている。他方、Jesus College 写本には多くの英語による宗教詩、*Proverbs of Alfred*, *The Shires and Hundreds of England* など入っている。また、ラテン語による *Assisa panis Anlie* やフランス語と英語による *Les vnze peynes de enfern*、そしてフランス語によるエチケットの教えも収められている。

Oxford, Bodleian Library, MS Digby 86も13世紀後期に書かれ、3ヶ国語の作品を含む。英語、ラテン語、そして、もっとも多く使用されている言語はフランス語である。最も古い英語によるファブリオと言われている作品、*Dame Sirith* と *the Fox and the Wolf* も含まれている。英語の作品もあるが、宗教作品のほとんどはフランス語で書かれている。収録されている作品のジャンルは様々で、宗教作品、文学作品だけでなく、実用的な告解、呪文、医学のテキストなども見られる。作品のタイトルに関しては、ラテン語とフランス語の作品のタイトルはそれぞれの言語だが、英語の作品のタイトルは必ずフランス語である。

British Library, MS Additional 46919は、ヘレフォードのフランシスコ会托鉢修道士であった William Herbert (1333年没)が14世紀初期に筆写した説教用のノートブックである。3ヶ国語の作品を含むが、フランス語で書かれているものが多い。ラテン語の作品のほとんどは Herbert 自身が著した説教である。また、ほとんどの英語の作品は彼のラテン語の詩を彼が自分で訳したものとなっている。宗教作品だけではなく、フランス語の料理のレシピ集の英語訳や狩猟などについてのテキストも収録されている。かつてフランス語の教科書で学んだ子供たちが大人になった14世紀は、フランス語はますます日常生活から遠い存在になっていたのであろう。このように、生活に密着した内容のテキストも英語に翻訳されるようになって

14世紀前半、英国中西部で書かれた

British Library, MS Harley 2253 には、'Harley Lyrics' と呼ばれている、恋愛詩、政治的な詩、マリアへの祈りなど、世俗的あるいは宗教的な英語による抒情詩が収録されている。他に、ラテン語の説教詩や散文、フランス語による聖者伝やファブリオ、短い詩などを含む。

アイルランドは 1169 年、ノルマン人によって征服され、イングランドの言語状況と類似したことが起こった。1330 年頃、アイルランドで書かれたことが知られている British Library, MS Harley 913 も 3ヶ国語で書かれている。風刺詩としてよく知られている *The Land of Cokaygne* がこの写本に収められている。中英語（中世アイルランド英語）、フランス語（アングロ・ノルマン語）、ラテン語の 3 言語による作品が収録されており、中英語によるものは宗教詩、風刺詩が主であり、フランス語の詩は 2 つしかないが、元来はもっと含まれていたことがわかっている。フランシスコ修道会との関係の深いこの写本には、聖フランシスコや修道会に関わる記録が残されているが、すべてラテン語で書かれている。Harley 913 はウォーターフォードで書かれたと考えられるが、ウォーターフォード博物館に所蔵されている *Liber Antiquissimus Civitatis Waterfordiae* と呼ばれている写本には 15 世紀中頃から 17 世紀の中頃にわたってウォーターフォードの町の歴史が記されている。その中には、13 世紀初期のウォーターフォードの町に関する記録もさらに古い文書から書き写されていたので、中世から 1640 年に至る町の詳しい歴史を知ることができる。興味深いのは、これらの記録も 3ヶ国語で記されており、時間の経過にしたがって英語の使用が増えてゆくことが見て取れる。

このように、時代を追って、説教をしたり、人々を教化する立場にある聖職者や托鉢修道士が筆写したり編纂したりした 3ヶ国語の写本を調査してみると、13 世紀中頃には英語が書きとめるに値する言語となり、フランス語やラテン語と同じ写本に現れるようになる。その時期、まだラテン語やフランス語が書き言葉として多くの頁を占めていたが、ラテン語の作品が英語やフランス語の訳と同時に収録された写本もあることから、おそらくは聴衆が英語またはフランス語を母語とする者であったことが察せられる。写本全体からするとまだ大多数を占めないまでも、13 世紀後期になると、より多くの英語の作品が載せられるようになる。この時期はまだ実用的な内容のものはフランス語のものが多かったが、14 世紀に入るとそれらも英語に翻訳され、他の言語の作品とともに収録されるようになる。ラテン語は権威ある記録の言葉として扱われていたが、それ以上の意味をもたなくなり、13 世紀に後半にはすでに、3ヶ国

語で書かれた写本に占める割合は一番少ない場合が多かった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 5 件)

- ① 和田葉子、修道女? の手引き—*Ancrene Wisse* とその作品群の読者、関西大学東西学術研究所研究例会、2009 年 3 月 27 日、関西大学東西学術研究所
- ② 和田葉子、修道女は 'Wooing Group' といかに関係したのか: '*Ancrene Wisse Group*' と神秘主義、日本英文学会第 80 回全国大会シンポジウム「ヨーロッパ中世の神秘主義——霊性とナラティブ」、2008 年 5 月 24 日、広島大学東広島キャンパス
- ③ 和田葉子、初期中英語の宗教作品に見る愛の受難曲、関西大学東西学術研究所国際シンポジウム「国境なきヨーロッパ文学における異文化接触の形」、2008 年 5 月 10 日、関西大学東西学術研究所
- ④ 和田葉子、アイルランドにおける中英語、関西大学東西学術研究所研究例会、2008 年 3 月 25 日、関西大学東西学術研究所
- ⑤ 和田葉子、どの言語で書くべきか: 中世英国におけるフランス語・英語・標準語の状況について、関西大学東西学術研究所研究例会、2007 年 1 月 26 日、関西大学東西学術研究所

[図書] (計 2 件)

- ① 和田葉子、他、関西大学出版部、国境なきヨーロッパ文学と思想における異文化接触の形、2010、69-90
- ② 和田葉子、他、雄松堂、中世イギリス文学入門—研究と文献案内、2008、71-76

6. 研究組織

(1) 研究代表者

和田 葉子 (WADA YOKO)
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号: 00123547